余計な一言

群馬県高崎市立群馬南中学校三年
原田桜輔

「髪切ったの？勿体無い。」

「このゲーム買ったんだね。これ面白くないよね。」

「このキャラ好きなんだね。私、嫌い。」

など、ついつい付け足される余計な一言。どの世代でも色々な形で使われている、余計な一言。皆さんは、言っていることはないだろうか。

私も言ってしまうことがある。後から、あの言葉要らなかったかなと後悔する日もあれば、無意識で言ってしまっているので今でも自覚していない言葉も多々あるだろう。

その余計な一言を周りから言われる事もある。その時は笑って誤魔化していても、余計な一言ってやつは、何故か心に残る。

「髪切った？」までは気付いてくれて嬉しい。なのに、「勿体無い。」が加わることで心

にモヤがかかる。似合わないってこと？切ら

なきゃよかったってこと？髪を切って爽快な

気分が、余計な一言で台無しだ。

「このゲーム買ったんだね。」からの、「面

白くないよね。」の一言は買ったことを後悔さ

せてしまう。好きなものを嫌いと言われると

悲しくなる。

嘘を言う事はないが、言っている側も言わ

れている側も気持ちの良い言葉を選びたい。

出来れば、

「髪切ったんだね。似合うね！」

「このゲーム買ったんだね。楽しそう！」

「このキャラ好きなんだね。可愛いよね！」

これなら、お互いにいい気持ちで会話ができ

るのに。

友人に聞いてみた。

「余計な一言って言った事ある？」

「そんなの悪気があって言ってるわけじゃな

いから覚えてないよ。」

そうなのだ。悪気があって言っている訳で

はないのだ。多少嫌味があったり、羨ましかったりするが、記憶に残るほどの悪意はないのだ。悪意はないのに、言われた相手は心に残る。大切な家族や友人を傷付けない為にも、少しでも言葉の変換をしたい。

これは大人になっても続いていく課題。その大人に質問してみた。

「余計な一言って、一体何なのでしょうね。」

「余計な一言は言わなくていい言葉。それは自分の意見や価値観の押し付けかも知れないね。」

私はそこで初めて知った。余計な一言とは、その人の価値観だったのだ。そう考えると、気にしたり、傷付いたりする事が馬鹿らしくなってくる。他人の価値観に振り回される必要は、本来ない。それなのに、余計な一言は、こちらを振り回そうとしてくる、傷つけようとしてくる、という構図が見えてくる。なるべく余計な一言を言わないように意識して、相手の立場に立って言葉を選ぶことが大切だ、

ということが分かってくる。

余計な一言について考えていくうちに、余計な一言の定理が分かったような気がする。それは、〝私が気にせず言っている言葉が、相手を傷付けているかもしれない。〟そして、〝相手が気にせず言っている言葉を、私は気にしているかもしれない。〟ということだ。これからは、嬉しい気持ちになる、良い意味の「余計な一言」をたくさん伝えたい。初めに言った、「髪切ったの？めっちゃ似合ってる！これからもそれがいい！」などたくさんの良い言葉が飛び出してくると思う。そんな嬉しい言葉が多く飛び交えば、もう余計なほどに気持ちの良い一言が増えるはずだ。

言葉は人の支えになる。私が取り組んでいる野球でも祖父がかけてくれた嬉しい一言が支えとなっている。

「失敗は必ずある。大切なのは、それを受け

入れて努力をすることだよ。」

　試合でミスをしても、どんなに厳しい指導を受けても、この言葉が僕を支えてくれる。頑張ろう、諦めるなと自分を奮い立たせることができる。

　言葉は人の支えとなる。そして、自分の支えにもなる。このことを胸に刻み、生活することで、無意識に出てしまう「悪い」余計な一言を「良い意味」の余計な一言に移し替えることができるはずだ。

　誰もが前向きになれる社会、良い意味の余計な一言がたくさん飛び交う社会を、皆さんで作りませんか。

20 × 20